

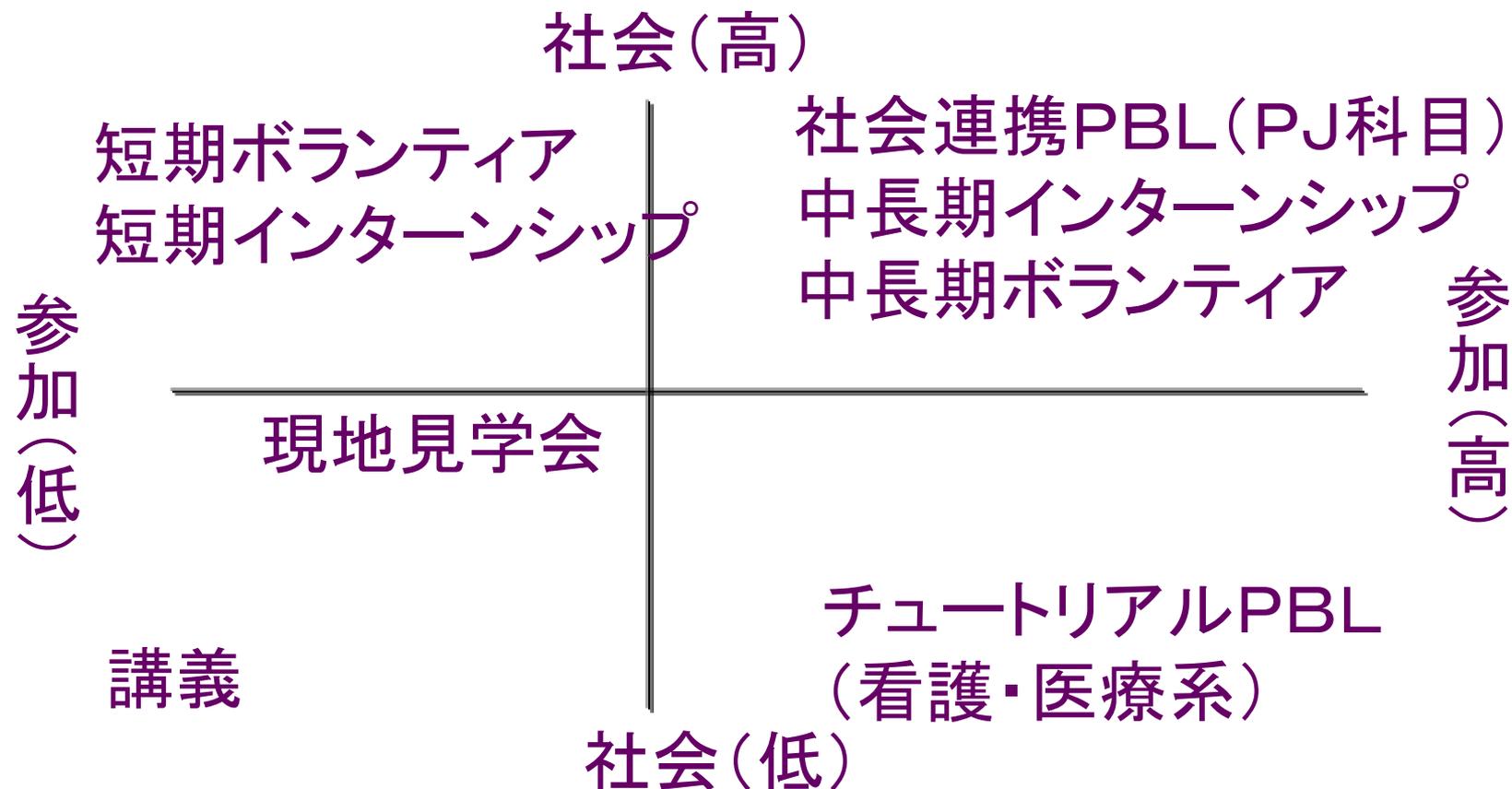
オンキャンパス(PBL)型インターンシップの可能性と課題 —同志社大学テーマ公募制プロジェクト科目の視点から—



用語の混乱

- アクティブ・ラーニングやPBL、TBLは教育・学習方法
- インターンシップやボランティア、サービス・ラーニング、産学連携、地域連携などは教育の役割・機能
- 講義や演習、実習、ディベート、プレゼンテーション、フィールドワーク、グループ学習、協働学習等は教育・学習形態

学習プログラムの位置づけ



インターンシッププログラムの種類

- 仕事理解型—

短期(一方向型)体験・見学によるイベント型

- 事業参画型—

中長期(双方向型)PBL型(オンキャンパス型・オフキャンパス型)

- 課題協働型—

中長期(双方向型)PBL型(オンキャンパス型・オフキャンパス型)

同志社大学プロジェクト科目の沿革

- 2003年9月 ■ ローム記念館完成（京田辺キャンパス）
- 2004年 ■ ローム記念館プロジェクト（課外）開設
- 2004年 ■ 現代G P「プロジェクト主義教育による人材育成」採択
- 2004年 ■ 文学部プロジェクト科目を新設

- 2006年 ■ 全学共通教養教育科目の整備・プロジェクト科目（正課）を新設
- 2006年 ■ 現代G P「公募制のプロジェクト科目による地域活性化」採択
 - ★ P B L 研究会の発足

- 2009年 ■ プロジェクト科目をキャリア形成支援科目群に再編
- 2009年 ■ 大学教育推進プログラム
 - 「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育」採択
- 2009年11月 ■ P B L 推進支援センター設置
 - ★ P B L 推進協議会の発足

プロジェクト科目設置の背景

■ 課題発見・探究能力の不足

- 情報処理能力は高いが問題発見・解決能力が弱い。
- テクニック・ノウハウの修得は長けているが未知・未決の問題を考える能力が弱い。
- 総じて、チャート無き事柄を自分で考え抜く力に欠けている。

■ 新しい教育／学習への展開 → P B L

- 自律的主体的学習・チーム学習・アクティブな学び

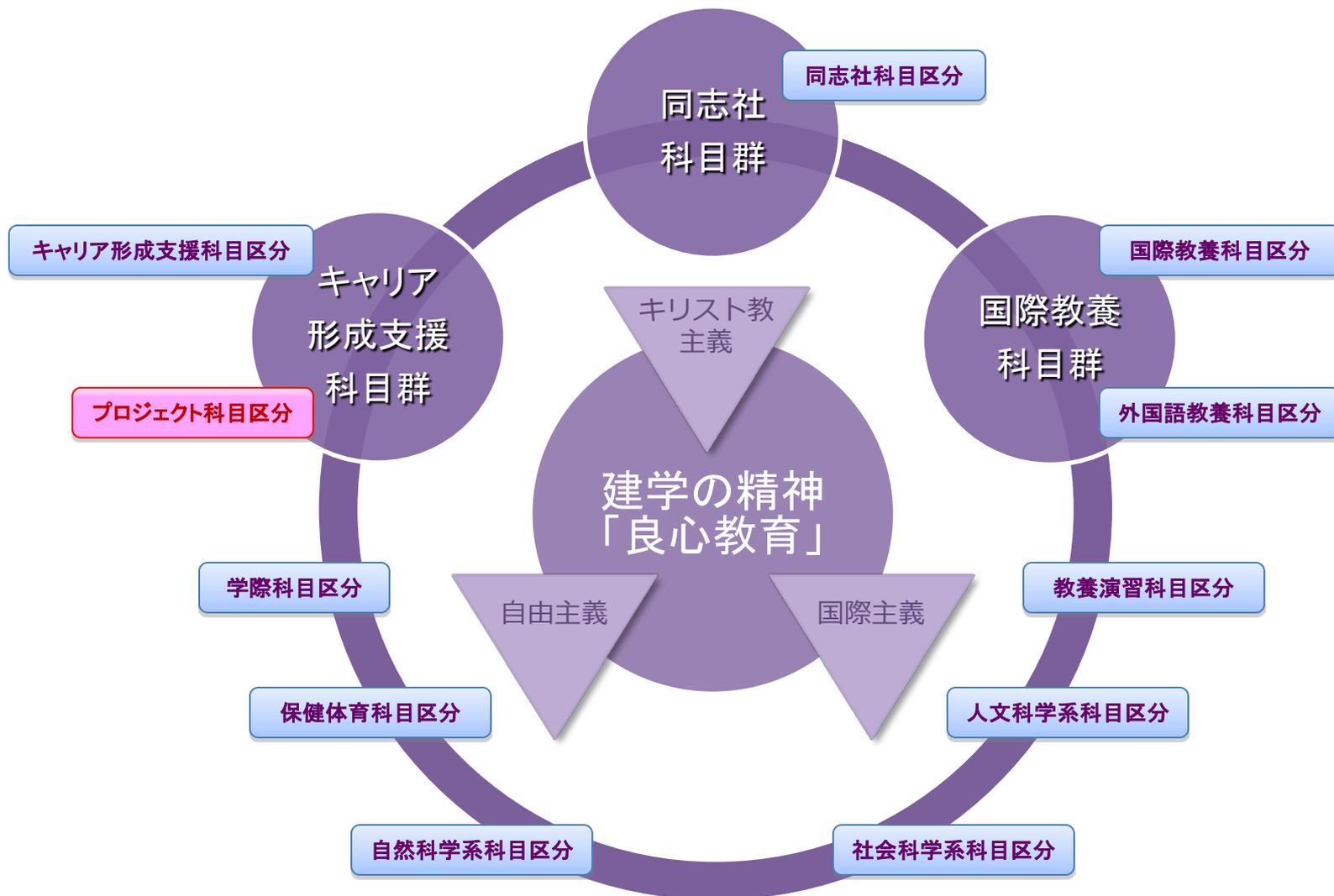
■ 往還型地域連携

- 「社会の教育力を大学へ」

■ 成功（失敗）体験・現場体験＝現場に学ぶ視点

- プロジェクトの現場（グループワーク等）＝社会の縮図

同志社大学 全学共通教養教育科目（3つの科目群） 2012年度現在



同志社大学プロジェクト科目の特徴 ～社会の教育力を大学へ～

- PBL (Project-Based Learning)を導入した実践型教育
 - テーマ公募制とテーマ提案者の嘱託講師採用。
 - 全学共通教養教育科目としてのPBL。
 - 往還型地域連携活動としてのPBL
 - プロジェクト・リテラシー育成を目指すPBL。
 - 現場と本物志向のチームPBL。
- ↓
- オンキャンパス型のインターンシッププログラム
 - 大学主導による広域インターンシップ(広域連携)

PBL(プロジェクトベースドラーニング)とは何か？

- PBLとは、プロジェクトの特性を活かした教育
- PBLの狭義の定義(プロジェクトとは何か？)

「一定期間内に、一定の目標を実現するために、自律的・主体的に、学生が自ら発見した問題に取り組み、それを解決しようと、チームで協働して取り組んでいく創造的・社会的な学び」

従来型科目との違い

	従来の科目	プロジェクト科目
授業の主役	教員	学生
学生の学ぶ姿勢	受動的→講義型	能動的→企画、提案、体験
教育目的	知識の習得、体系化	知識の統合化、総合化
活動の単位	個人	チーム、グループが中心
地域、社会との関わり	比較的少ない	密接

同志社大学プロジェクト科目テーマ公募制

1) 科目担当者(公募制)「社会の教育力を大学へ」

- ◆プロジェクトテーマを企業・団体・個人から募集。
- ◆プロジェクト科目検討部会委員(6~8名)で採択原案作成(面接実施)・教務主任連絡会議委員(約20名)にて採択と人件審議。審査も上記委員が行う。採択テーマの提案者を本学嘱託講師として委嘱。
- ◆本学専任教員が科目代表者として参加(以上、専任教員50名関与)。
- ◆審査時の面接、採択後のテーマ名微修正、シラバス作成、簡易web版科目紹介文作成等を通して授業内容と計画のブラッシュアップ。
- ◆各科目に必ずSA・TAを配置(学習支援者育成)。
- ◆20科目前後が採択される。
- ◆履修者数は200名から250名前後。
- ◆毎年、40~50件前後の応募。採択率は45%程度。
- ◆担当者は毎週の授業担当・現地調査引率・科目行事参加。
- ◆科目行事(成果報告会・成果報告書提出・担当者代表者懇談会)。
- ◆成績評価はGPA。授業運営の手引き配布。説明会実施。
- ◆プロジェクト科目事務局のサポート。コーディネーター的役割。

公募制

■ 募集対象者

設置趣旨に賛同し、本学専任教員と協力してプロジェクト科目を担当していただける企業、団体、個人。

企業、団体の場合、主たる科目担当者は**1名**。

- ※採択された場合、科目担当者1名を嘱託講師として委嘱
- ※同一テーマのプロジェクトの採択は3回が上限
- ※別途詳細な募集要項（一般用・学内用）を準備



社会の教育力を同志社大学へ！

あなたの提案が授業になる！2011年度プロジェクト科目、テーマ募集！

- 社会を生き抜く智慧・技術が求められています 企業・団体・個人より募集します！
同志社大学では、従来の教室での座学中心の授業形態とは異なった実践型・参加型の学習機会を重視したプロジェクト・ベース・ラーニング(PBL)を基本とする、授業科目「プロジェクト科目」を2006年度から設置しています。この「プロジェクト科目」は、地域社会や企業の方々を講師をお願いし、地域社会と企業が持つ「教育力」を大学の正規の教育課程の中に入場することによって、学生に生きた智慧や技術を学ばせるとともに、「現場に学ぶ」視点を含み、実践的な問題発見・解決能力など、いわば学生の総合的人間力を養成することを目的としています。
- プロジェクト科目とは... 「現場」に学び、学生自らが考え、行動する授業です
大学の学部生の正課科目で、プロジェクトをベースに学習を進めていく科目です。ご提案いただいたテーマをプロジェクトとして、学生が主体的・自律的に学んでいく形で授業を展開していただきます。従来の座学では経験できない、実践的・体験的学習です。
- プロジェクト科目を教員と共に担当してみませんか？
「プロジェクト科目」設置の趣旨にご賛同いただき、教員とともに「プロジェクト科目」をご担当いただき、学生の指導・教育の一翼を担っていただける企業・団体（地方自治体等を含む）・個人の方を募集いたします。
- ユニークなテーマを待っています！あなたの提案が授業になります！
設置趣旨に合致したプロジェクト実行型の内容であれば結構です。自由な発想でご応募下さい。なお、「春学期のみ」「秋学期のみ」あるいは「春学期・秋学期連続（＝通年）」のいずれかで完結して成果目標が定められるテーマ、内容であることとします。

※2010年度採択テーマ(抜粋)

- 京都の伝統織物発信プロジェクト ●夜間中学を社会に向けて発信しよう！夜間中学を知っていますか？
- 「スホータイムイベント開催！」学生と地域の連携によるスポーツクラブ ●取巻の力・若者たちの見た京都
- 「目まはら山」地区におけるまちづくりデザイン提案 ●地域の力・若者たちの見た京都
- 認知教育教材作成プロジェクト-環境マインドを持った次世代リーダーの育成
- 京の台所・露市場がつくる「京の食文化」を子どもたちに伝えよう！ ●新京都みやげの創造
- F1をつくろう！(2010 JSAE 学生フォーミュラ大会出場を目指して)

■ 科目の運営について

- (1) 科目代表者およびアドバイザーとして、本学の専任教員1名が科目の運営を代表することを条件とします。
- (2) 本学の科目代表者の教員とともに、学生の指導をお願いします。具体的には、提案していただいたテーマを基に、登録学生の選考、授業（春学期、秋学期それぞれ90分の授業に相当する講義を15回）、履修指導、成績評価、成果報告に携わっていただきます。登録前のガイダンス、開講前週ごとの成果報告会にもご参加いただけます。
- (3) テーマをご提案いただき、採択された場合は、同志社大学の全学共通教育科目として設置します。主として授業をご担当いただくテーマ提案者には、同志社大学嘱託講師として人件費補助の上、本学より委嘱させていただきます。本学の給与体系に基づき報酬に講師給を受給いたします。
- (4) 合格した場合、学生には、1セメスターにつき2単位が与えられます。
- (5) 1テーマにつき、受講（登録）する学生は、5～15名程度を予定しています。登録者が5名未満の場合は開講できません。
- (6) 授業運営予算として、1セメスター、1科目あたり3万円（税込、上限）の手当てが予定されています。使用範囲は、謝礼（学内規程に基づく金額でのゲスト・スピーカーの謝礼）、文房具費、図書費、印刷製本費、用品費、授業実施に伴う交通費（通勤経路外）および宿泊費などです。当予算は、原則、科目代表者が管理します。必要な予算の支出は、科目代表者・登録学生とご相談・調整の上、執行していただきます。なお、貴社、貴団体、個人において、「奨学助成金」として当科目の運営資金にご提供いただければ幸いです。
- (7) 授業担当者には「授業運営の手引き」を配付します。授業の運営や諸手続、成績評価の方法などについて解説しています。
- (8) 既に開講された科目と同一内容のテーマの場合、採択は3回を上限とします。(2008年度から適用しています。)

※ 詳細は「募集要項」をご覧ください。

公募制

■ 告知方法

※前年度8月中旬より募集（9月上旬に締切）

- プレスリリース／新聞広告
- ホームページ
- 商工会議所や自治体等に公募要領を送付
- けいはんなメーリングリスト等

■ 応募者の内訳

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
民間企業	28	13	19	12	9	12	8	14	9
自治体		1	0	0	2	2	3	0	2
NPO・NGO			15	13	11	10	12	6	6
教育機関	31	16			1	0	0	0	0
その他団体			5	7	4	4	7	12	7
個人	124	31	42	39	28	44	36	27	18
学内専任教員	4	1	2	4	4	0	6	0	1
合計	187	62	83	75	59	72	72	59	43

2015年度プロジェクト科目開講テーマ(17科目)

LOHASタウン実現プロジェクト	京都の伝統織物をつなぐ～織物文化ビジネスプロジェクト～
子供が喜びながら遊び学べる知育玩具の企画立案	災害に強い地域循環型共生コミュニティの実現
東洋医学で京田辺を健康にするプロジェクト	同大生“GLOCAL”プロジェクト ～国際協力と地域社会貢献
地域応援プロジェクト ～同志社から、スポーツの力で恩返し～	観光都市京都の新土産 ～世界に発信する新土産～
テーマパークの利用者満足度向上に関する企画立案プロジェクト	ラジオで発信-若者と高齢者の音楽イベント制作
空き店舗を活用した地域活性化Ⅱ-風が起こすムーブメント-	京都発！補助犬ガイドブック作成プロジェクト
以上京田辺校地開講科目 以下今出川校地開講科目	京都が培ってきた文化産業の素材・技術のリデザインと発信
プロスポーツの集客・チケット販売の実践で学ぶマーケティング	「大学が運営するフィットネス」の在り方と地域連携について
絵本百花～最愛の1冊に会うプロジェクト～	コミュニティをデザインする～家から始める居場所づくり～

取組・運営方針の審議・決定



大学

部長会

教務主任
連絡会議

プロジェクト
科目検討部会

国際教養科
目検討部会

キャリア形成支援
教育検討部会

同志社科目
検討部会

P B L 推進支援
センター委員会

P B L 推進支援センター

全学共通教養教育センター

同志社大学プロジェクト科目教養教育PBL

2) 履修生(教養教育)PBL

- ◆ 全学共通教養教育科目として設置。
- ◆ 春学期・秋学期・春秋連結の三種類の設置。
- ◆ 1年次生(秋学期から)～4年次生までの学部生が履修。
- ◆ 学部・男女比も偏りが無い。初対面からのプロジェクト。多様な価値観。
- ◆ 希望者は、説明会に参加し、先行登録が必要(登録志願票)。200名登録/300名志願。
- ◆ 1プロジェクトは、5名以上19名以下の少人数制。
- ◆ 超過した場合、志願票や面接などによって選考。
- ◆ 15回授業(授業は全体会議)・授業外学習(MTG・調査)
- ◆ 学生担当者説明会、リテラシー講習会、成果報告会(全科目)に出席。
- ◆ 活動記録・議事録・報告書・企画書など提出。
- ◆ 学生成果報告書、相互評価票、自己評価票(中間・最終)など提出。
- ◆ 1 Semester 30万円の授業運営費補助。会計担当学生。科目代表者押印。
- ◆ 謝礼(ゲストスピーカーなど)、文具雑品、図書費、印刷製本費、用品費など。

プロジェクト科目の目的



問題発見能力
問題解決能力
の養成

社会で活躍
するための
総合的人間力
陶冶

協働的・集团的プロジェクトの遂行

プロジェクト・リテラシーの養成

自らキャリアデザイン(人生設計)できる人物養成

プロジェクト・リテラシーの養成

プロジェクトの特性に
ついての理解

目的に応じた効果的・
効率的な推進方法

課題探求力

課題解決力

表現力

コミュニケ
ーション力

マネージ
メント力

企画立案力

情報
リテラシー

持続力

忍耐力

チーム
ワーク

リーダー
シップ

フォロワー
シップ

サポーター
シップ

省察力

自己管理力

段取り力

実行力

調査分析力

コンプライ
アンス

ストレス
コントロール

総合的・創造的に運用する能力・モラル(良心)

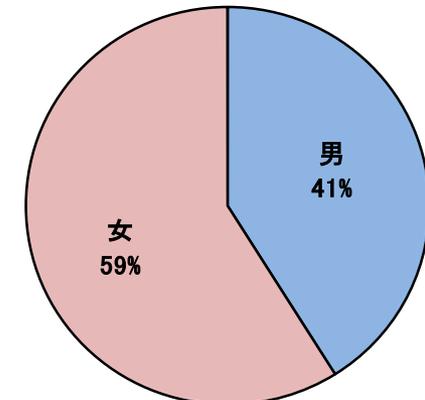
プロジェクト・リテラシー

■2013年度プロジェクト科目所属学部・年度別登録者数(履修中止後)

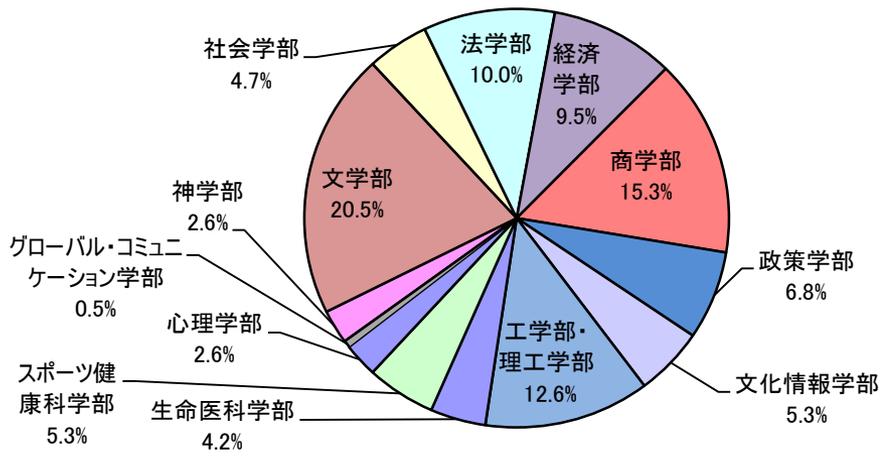
入学年度 学生所属学部	2013	2012	2011	2010	2009	2008	合計
神学部		3	2				5
文学部		12	20	6	1		39
社会学部		1	5	3			9
法学部		10	6	3			19
経済学部		5	10	2			17
商学部		10	17				27
政策学部		8	3	2			13
文化情報学部		3	5	2			10
理工学部		7	3	12			22
生命医科学部		3	5			1	9
スポーツ健康科学部		2	6	2			10
心理学部		2	3				5
グローバル・コミュニケーション学部	1(※)						1
合計	1	66	85	32	1	1	186

※早稲田大学交換学生(グローバル・コミュニケーション学部1名)は、2013年度生に算入

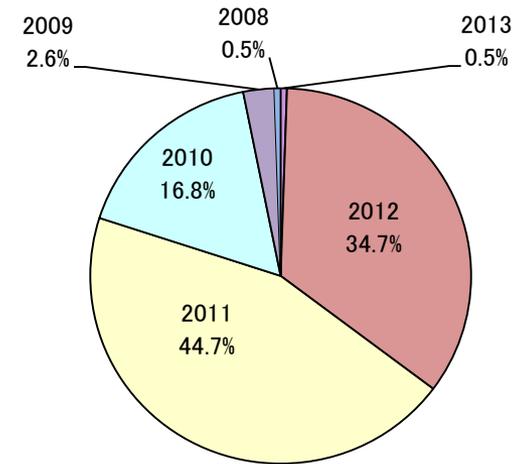
プロジェクト科目登録者男女別比率



プロジェクト科目登録者学生所属学部比率

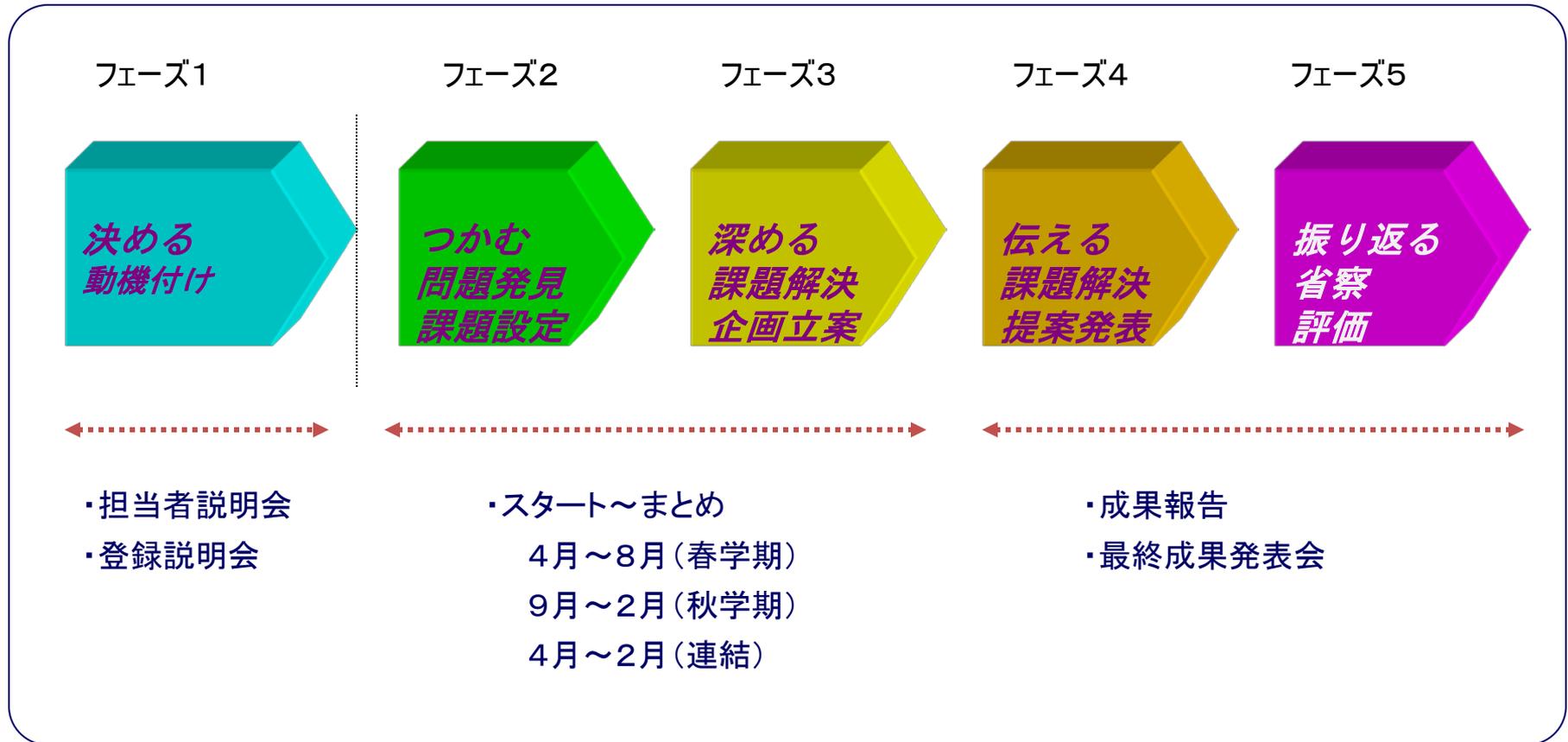


プロジェクト科目登録者入学年度別比率



開講年度	登録者数(のべ)	履修中止者数(のべ)	履修中止率 (履修中止者／登録者数)×100
2009	331	24	7.25%
2010	269	33	12.26%
2011	288	35	12.15%
2012	259	34	13.12%
2013	211	21	9.95%

プロジェクト科目の5つのフェーズ



イベントスケジュール 2013年度

年月	2013年度プロジェクト科目関連	2014年度 公募に関するスケジュール	2013年度 PBL推進支援センター関連
2013年3月	3/30 先行登録説明会		
4月	4/5 SA/TA協議会		
	4/8 春学期 授業開始(プロジェクト活動)		
5月	5/9・10 学生担当者説明会		
7月	7/8 春学期 学生懇談会		7/1 第1回プロジェクト・リテラシー講習会 「伝える技術について～ポスターセッション～」
	7/22 春学期 SA/TA懇談会		7/20 第1回PBL推進協議会 「PBL型教育における学生支援を考える」
	7/28 春学期 成果報告会(京田辺キャンパス)		
8月	8/3 春学期 科目担当者・代表者懇談会	8/3 2014年度プロジェクト科目 公募説明会	
9月	9/25 秋学期 授業開始(プロジェクト活動)		
10月			10/26 PBL教育フォーラム2013 「PBL型教育における学習効果の検証 ー卒業後の現場からー」
11月			11/29 第2回PBL推進協議会(九州産業大学) 「PBにおける地域連携のかたち ～域連携型プロジェクトの課題を考える～」
12月		12/14 2014年度プロジェクト科目 科目担当者・科目代表者説明会	12/16 第2回プロジェクト・リテラシー講習会 「表現する技術について～プレゼンテーション～」
2014年1月	1/15 秋学期 学生懇談会		
	1/17 秋学期 SA/TA懇談会		
1月	1/19 秋学期 成果報告会(今出川キャンパス)		
2月			2/21 第3回PBL推進協議会(東京オフィス) 「PBにおける地域連携のかたち ～域連携型プロジェクトの課題を考える～」
3月	3/1 秋学期 科目担当者・代表者懇談会		

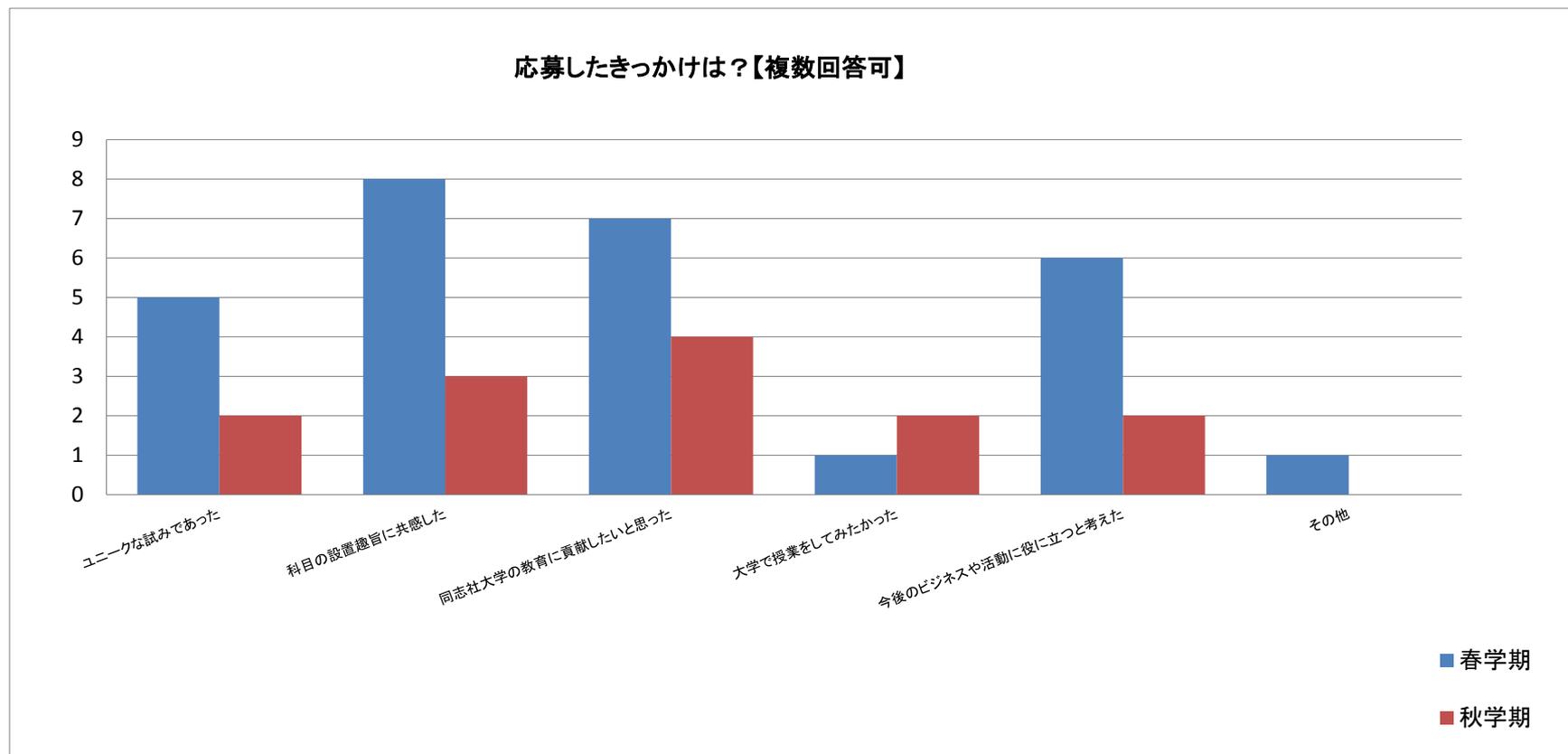
履修後の感想

- 自分の力だけでは勉強できないことが学べた
- 実際、社会に出たときに役に立つ情報や知識を得られた
- 自分の足で調査することの楽しさを知った
- 視野を広げることができた
- 積極性・行動力・コミュニケーション能力・企画力が身に付いた
- 意識の高い学生と共に学び合い、成長できた
- 自分の考えが反省されるのが良かった
- チームで何かを成し遂げることの喜びと難しさを学べた
- 専門の必要性がわかった
- 多様な価値観と出会う喜びを感じた

2015年度プロジェクト科目 担当者アンケート結果

- 応募したきっかけは？
- 来年度もプロジェクト科目に応募しますか
- 学生の知識レベル・能力について
- 学生の授業への取り組みについて
- 授業運営費について
- 授業への支援体制や制度について

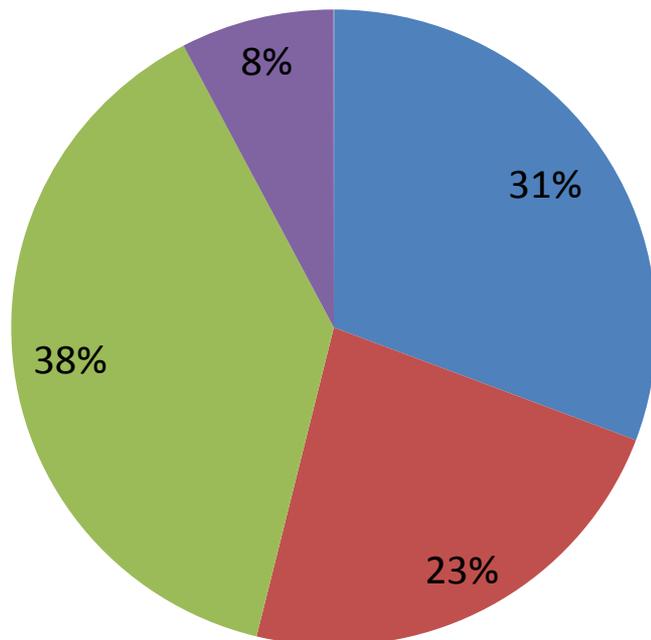
応募したきっかけは？



ユニークな試みであった 科目の設置趣旨に共感した 同志社大学の教育に貢献したいと思った
 大学で授業をしてみたかった 今後のビジネスや活動に役に立つと考えた
 その他は教職員に勧められた

来年度もプロジェクト科目に応募しますか

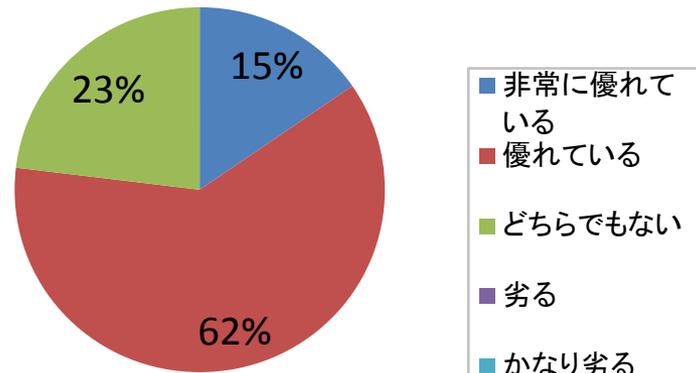
春学期



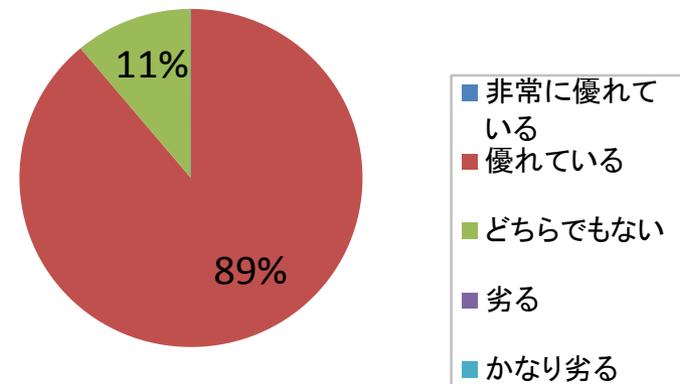
- 必ず応募する
- 出来れば応募したい
- 未定
- 応募しない
- その他

学生の知識レベル・能力について

春学期

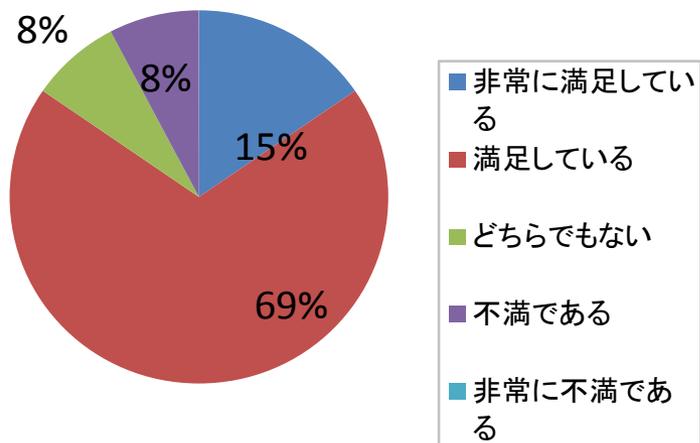


秋学期

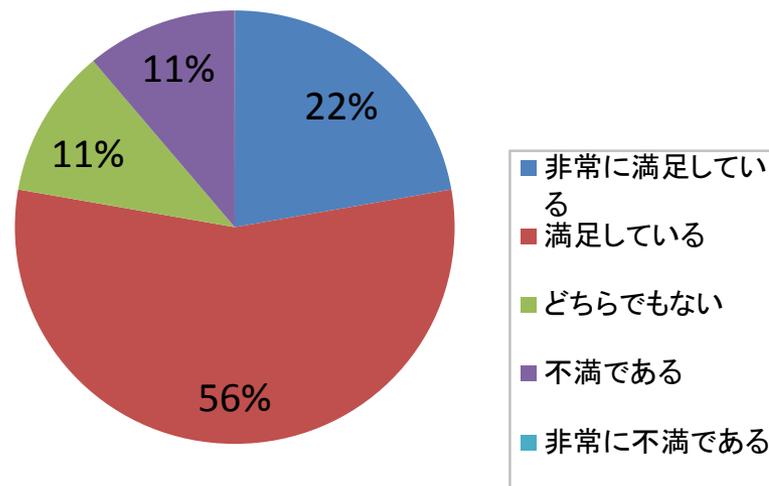


学生の授業への取り組みについて

春学期

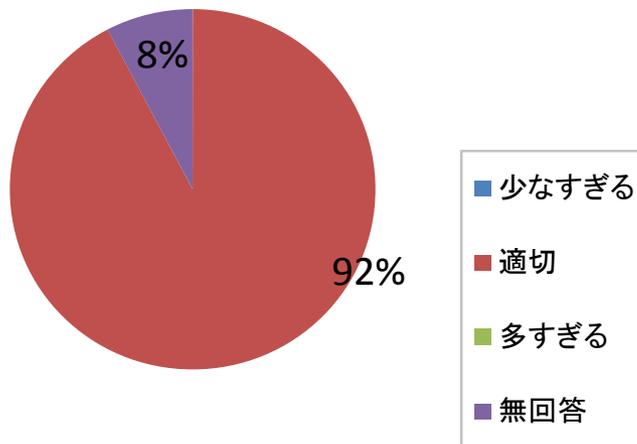


秋学期

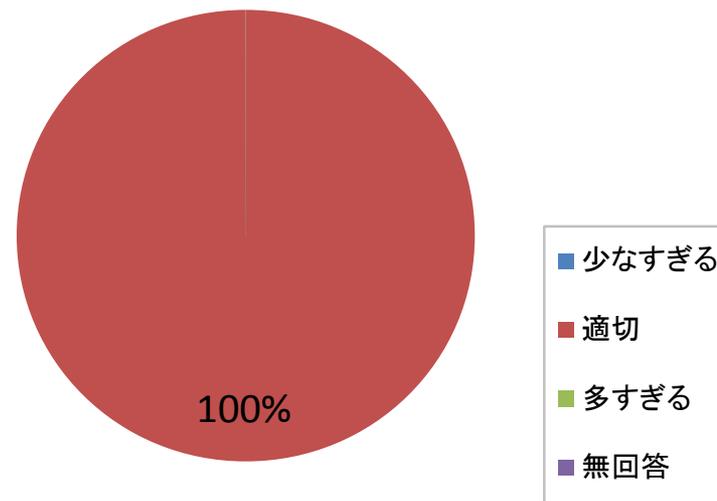


授業運営費について

春学期

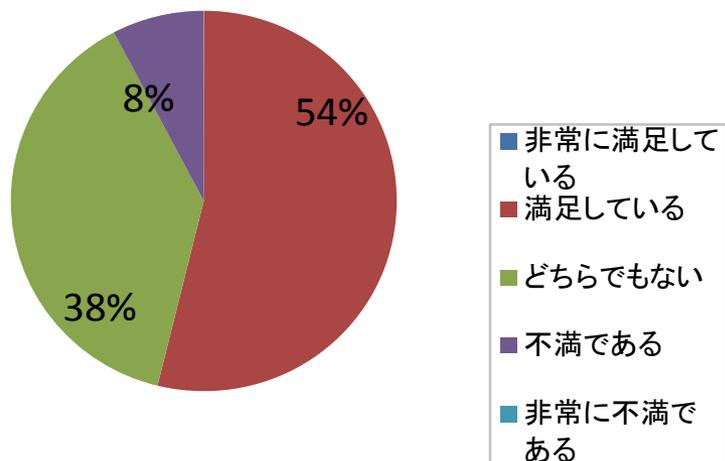


秋学期

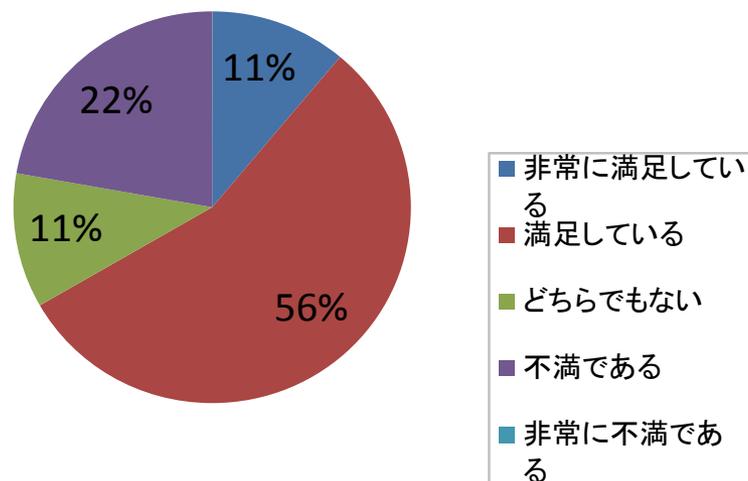


授業への支援体制や制度について

春学期



秋学期



オンキャンパス型インターンシップの長所

- 大学の教育資源をフル活用して企業等担当者が学習支援を行うことができる→教室の手配、機材の準備・貸出、印刷・配布、SATA(学習支援者)の配置、会計処理・科目運営の相談等を随時一括で行うことができる。なお、学生がミーティング等を行うラーニング・コモンズも完備している。
- 大学の研究資源を活用できる。→幅広い研究専門領域を有する教員との連携がとりやすい。また、図書館をはじめとする研究文献・資料を利用したり、学生に積極的に調査依頼もしやすい。
- 企業等側の学生受け入れも期間・時間限定なので、担当者が所属する企業、団体等と直接相談して、必要な部署と連携することがスムーズに行える。あるいは、必要と判断される関係諸機関・団体とも連携がとりやすい。
- 履修生の交通費も、毎回ではなく、ねらいを絞った現地調査や相談等に限られるために抑制することができる等、大学、企業等、学生にもメリットが多い。

インターンシップにおける教育機関と企業のずれ

- “何を学ぶのか”目標が明確化されておらず、効果がみとめにくい 42.8%
- 企業、教育機関の双方のメリットを享受できる仕組みにすべき
- 企業のボランティアに頼りすぎている、企業の負担が大きい
- 企業と学校の仲介役となるコーディネーターを充実すべき
- 予算面で行政のバックアップを強化すべき
- 現場の教員にとっても負担が大きく、対応余力がない
- その他
- 東京商工会議所「初等・中等教育(小・中・高校)における「キャリア教育」と産業界の関わりについて」平成18年

インターンシッププログラムの基本

- オンキャンパス型インターンシップは、何をどのように学ばせるかではなく、何をどのように解決するかを考えさせる。短期インターンシップのように、この業務を依頼するのではなく、これを何とか解決したいのだが、どうすればいいのだろうかと問いかける。
- 言い換えれば、ずばり課題をだすのではなく、解決してほしいテーマを出して、それを解決するために課題を適切に設定して、解決策を考えさせる。それを学生と社員がいっしょに考えるところがポイントだ。課題をあらかじめ与えてしまうと、それを解決すればいいということになり、視野も広がらず、課題を解決するパースペクティブも限定的になる。その結果、モチベーションが持続できなくなる。
- テーマ公募制はインターンシップで「何を実現したいのか」「何を学ぶことができるのか」を考えて、応募することによって、あいまいな取り組みを少なくできる。同時にテーマ提案者である学外科目担当者が、授業設計を入念に行い、それを審査時の面接や採択後の説明会、シラバス作成、簡易web版科目紹介文作成等でブラッシュアップできる。プログラムの肝である。

中長期インターンシッププログラムの学習支援

- 学外担当者の負担軽減と相互点検の仕組
- 企業等担当者に丸投げしない
- 授業における議論・議事進行は学生が行う→担当者は論点の提示や課題の再定義等指導に集中できる→授業のメリハリ
- 授業外ミーティングは学生のみで行う→負担軽減と学生の自律的学習
- 毎回の授業報告はSA・TAが行う→負担軽減と授業実態把握
- 毎回の会議・ミーティングの議事録は履修生が作成して共有→進捗確認
- 各種講習会(アイデア出し・プレゼンテーション・会計等)は事務局と検討部会が開催し、学生の代表が参加する→負担軽減
- 成果報告会で客観的に担当プロジェクトの評価ができるとともに、他の担当者と交流し、意見交換できる→担当プロジェクトだけを見る蛸壺状態に陥らない環境設定→担当者も学生も相互評価の視点を意識
- ワンストップ型の事務局サービス→担当者の問合せや学生の書類受付、備品貸出、企画書受付、領収書処理、窓口での相談等すべてワンストップ方式で行い、担当者・学生の負担を軽減→コーディネーター的役割

中長期オンキャンパス型(PBL)インターンシップの課題

- 大学と企業等担当者の真摯な議論
- 授業がシラバスと大きく異なったり、公募テーマの趣旨と異なったりする場合、学生の自主的な学習が阻害される可能性がある場合には、検討部会委員及び事務局で面談を行い、是正を促すこともある。
- 事務局は、SA・TAの活動報告やそれぞれのプロジェクトの会計の流れからプロジェクトの現状をおおよそ把握できる。こうした授業活動の検証ができる仕組みも必要である。インターンシップでもSA・TAの活用を推奨する。
- プログラムや種々の仕組みを作ってもそれを活かすことができるように、大学と企業担当者等が率直に意見交換するために面談や議論の場を持つことが必須と言える。そこから相互理解が生まれる。
- 企業等担当者が提案したテーマに学生がどれだけ興味と関心を持って取り組むことができるか、テーマから主体的に課題を設定できるかに成否はかかっている。学生と担当者がともに課題を共有できるか。

「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」への転換

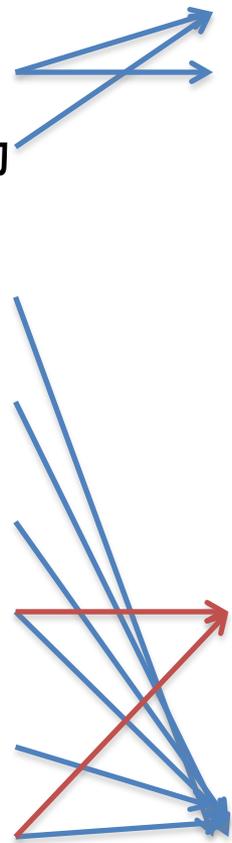
- 人間関係形成能力
 - － 自他の理解能力
 - － コミュニケーション能力
- 情報活用能力
 - － 情報収集・探索能力
 - － 職業理解能力
- 将来設計能力
 - － 役割把握・認識能力
 - － 計画実行能力
- 意志決定能力
 - － 選択能力
 - － 課題解決能力

- 人間関係形成・社会形成能力
- 自己理解・自己管理能力

PBLの特色領域

● 課題対応能力

● キャリアプランニング能力



共育型インターンシップ 経営課題

- 将来を担う人材を確保し、育成する。あらゆる企業が直面する最重要の課題である。そのためには本業をしっかりとさせ、人が育つ職場にしなければならない。教育界と連携し、社会で働く力を学生に身に付けてもらう。学生と企業人が共に働く新たな「場」を用意することで、本業と人材を同時に強化できる。（人が育ち企業が伸びる新たな「場」経済産業省）
- 全体 新規人材の確保・育成52.2
- 中小企業 新規人材の確保・育成53.8
- 中堅企業 新規人材の確保・育成85.3
- 大企業 国内競争の激化 50.3

（インターンシップの実施状況に関する調査）

学ぶことは働くこと・働くことは学ぶこと

- 大学での学びと企業での学びを、創造的、社会的学びとして等価と見なす、生涯学習的な学びの視点と方法を身につけることを重視
- 大学と企業は双方向的な学びの実践を通して将来の有為な人物を養成すべきである
- 「社会の教育力を大学へ」＝「大学の教育力を社会へ」
- プログラムが大学と企業をつなぐ往還的な学びの回路になる→中長期（PBL型）インターンシップ
- 大学と社会に共通する学びのプラットフォームを作る

企業等の社内研修としての大学プログラムの活用事例

- 現地調査を行い、ニーズ調査とその結果を分析して、新商品のアイデア、試作、パッケージ制作まで行い、社内の役員プレゼンまで遂行する。場合によっては商品化されることもある。
- 全体としてはマーケットリサーチの方法などをレクチャーしたりプロジェクトの方向性をコントロールする
- 数名の社員が分担した複数のプロジェクトを担当する
- 各チームをいかにマネジメントできたかが明確であり、複数で切磋琢磨できる。
- プロジェクト科目全体の成果報告会に向けてスケジュール管理ができる。

企業等の社内研修としての大学プログラムの活用事例

- 社員のプロジェクトマネジメントの力を実践的に身につけることができる。
- フラットな人間関係の中で相互理解、対話力、自己管理能力、チーム作りのコツを学び、仕事に活かすことができる。
- 学生(社員)に考えさせる方法を体験的に学ぶことができる。
- プレゼンテーションの技術的な向上が認められる。
- 生産工場の社員と交流し、現場に開放感が広がる。
- 役員プレゼンが商品開発の現場に緊張感と刺激をもたらす。
- 学生のアイデアを厳選できる。
- 若者のマーケットリサーチができる。
- 大学の授業に関わるということで社会貢献できる。

企業等の社内研修としての大学プログラムの活用事例

- 普段の座学とは異なり実際に企業の方と商品を企画することができた
- リアルなマーケティング活動に携わることができた。また、4回程に及ぶプレゼンでは、企業の方や先生から厳しいアドバイスをいただきながら1つ1つ改善していくことができた
- 実際に自分たちでマーケティングをし、商品を企画し、完成した商品を見たとき感動した
- 企業の方にプレゼンテーションをする機会は学生するときにはあまり体験できないと思うので、貴重な体験ができた
- 少人数なので、仲間との距離が近く、密度の高い議論を交わすことが出来たこと

今後の課題

- プロジェクトの質的な向上→システム開発(4月から試行)
 学習プロセスの再定義→課題設定力の向上へ
 ATSS(アクティブ・シンキング・サポート・システム)
 1)着想・発想・2)問題発見・3)課題設定・4)課題解決・5)省察・評価
- 担当者の育成→対話の機会・審査体制
 懇談会・説明会・窓口対応・審査体制などの見直し
- 学習支援者の育成→SATA協議会の再定義
- 教職員のFD・SDとしてプロジェクト運営を有効に機能させる
- アクティブな評価法の模索→PBL推進協議会・担当者懇談会
 ポートフォリオプロセス評価・到達度評価・評価指標の設定・評価素材の検討
- PBL推進支援センターの学内連携→学内PBLの情報交流